

# 米袋のセカンドライフ



Photo by coll.part. / Coop

from Zurich

ヨーロッパにおける環境先進国というところ、北欧やドイツを思い浮かべる人が多いが、スイスも負けてはいない。カーシェアリングはスイスが発祥であるし、オーガニックフードは、国民一人当たりで換算すると年額一七〇フラン（約一万七〇〇〇円）を費やしている、世界で最も有機食品を購入する国民なのだ。また昨年夏からは、ドイツに先駆けて、高級志向のスイーパーチェンで携帯型のセルフレジが導入され、売り場内で持参のエコバッグに商品を詰めながら買物ができるようになった。

ア生まれである。「どうです、私のセカンドライフ。華やかでしょう！」  
エコバッグからは、そんな自慢の声が聞こえてきそうだ。  
デザインを手がけているのは、スイスの高級リゾート・ローザンヌ出身のニナ・レバーさん。ニナさんは元ジュエリーデザイナーとして一〇年以上の経験を積み、現在、ローザンヌに「コル・パート」のブティックを構えている。

スイスでは、廃棄される素材を利用したエコバッグがいくつか登場している。チューリヒに本拠地を置く、トラックの幌や車のシートベルトを使った「フライターグ」は日本でも人気だ。  
さらに最近、きらびやかな発色のエコバッグ「コル・パート」(特別なコレクションというフランス語の略)が注目を集めている。その素材は、なんと米袋。米を詰めるという第一の人生を無事に終え、充実した第二の人生を送る榮譽を手に入れた米袋は、カンボジア生まれである。  
「どうです、私のセカンドライフ。華やかでしょう！」  
エコバッグからは、そんな自慢の声が聞こえてきそうだ。  
デザインを手がけているのは、スイスの高級リゾート・ローザンヌ出身のニナ・レバーさん。ニナさんは元ジュエリーデザイナーとして一〇年以上の経験を積み、現在、ローザンヌに「コル・パート」のブティックを構えている。  
スイスと遠く離れたカンボジアとの縁は、建築家のご主人が結んだ。彼の仕事で一家揃って、二〇〇三年に同地に滞在した折、素の米袋に一目惚れしたのだ。同地で使われている隣国ベトナム製の魚の袋にも恋をした。原石を生かして宝石をデザインするように、袋のカンボジア語や、魚などの絵柄をそのまま生かしたデザインを思いついたという。  
素材に加えて製造にもこだわった。同地には利益だけを追求し、労働環境を整えない企業がたくさんあるが、パートナーにはなりたくない。そこで、あるワークショップを通じて村の二つのNGOに  
バッグ作りを頼んだのである。  
ニナさんの「コル・パート」への熱い思いには、すでに多くの人たちが共感し、現在カンボジアとスイス以外にも七カ国で販売中だ。毎年パリで開催されている世界最大のエコとフェアトレードのファッションショー「The Ethical Fashion Show」にも参加し、「コル・パート」の新作を披露し続けている。  
今や、有名高級ブランドもエコバッグを売り出し、エコバッグをもつことは、世界各地で一種のブームの様相を呈している。  
「今のエコバッグの状況はファッションです。でも、流行のお洒落」という域を超えて、「普段着」として定着させなければダメなのです。リサイクルやオーガニックなどもそうです。そうしなければ私たちは死滅してしまうでしょう」  
ニナさんはそう断言する。  
フェアな事業を行う企業・個人への賞「倫理的なスイス」を一昨年に受賞したニナさんだが、「受賞のこと、すっかり忘れていたわ」と笑った。本当のエコとは、こんな当然のことをしている「という意識」なのだ。  
(岩澤里美)